

日本語並立助詞「と」・「や」と英語冠詞に関する一考察

—BCCWJ データに基づいて—

川口 裕子 (神戸女学院大学大学院研究生) †

On Japanese Parallel Markers and English Articles —Based on BCCWJ Data—

Yuko Kawaguchi (Kobe College Graduate School, Research Student)

1. はじめに

日本語には冠詞が存在しないが、日本語の格助詞「は」・「が」と定冠詞・不定冠詞との対応関係についてはしばしば論じられてきた。上村(1978)は、「は」は旧情報に言及しており定冠詞(the)に対応し、「が」は新情報に言及しており不定冠詞(a/an)に対応すると述べている。

並立助詞「と」・「や」はそれぞれ「全部列挙」・「一部列挙」を表すとされるが、実際の用例は多岐にわたる。筆者は、並立助詞「と」・「や」の用例の一部と冠詞に対しても対応関係が存在すると思われる。本研究では、「と」は新情動的、「や」は旧情動的側面があるという先行研究の主張を踏まえ、BCCWJ データより「と」と「や」の用例を分析し、「と」は不定冠詞、「や」は定冠詞に類似した役割を持つと考える根拠を示す。

2. 冠詞

現代英語の冠詞には、定冠詞(definite article)と不定冠詞(indefinite article)があり、それぞれに異なった意味機能を持つ。安藤(2005)によると、定冠詞(definite article)は同定機能(identifying function)を持ち、文脈または場面から指示対象が聞き手にとって唯一的に同定可能(uniquely identifiable)である場合、つまり指示物が聞き手にとって旧情報(old information)に属するという前提が話し手の側に存在する場合に使用される。一方、不定冠詞にはそのような前提は存在しない。

Jespersen(1933)は、英語の定冠詞と不定冠詞について以下のように述べている。

The chief use of the (definite) article is to indicate the person or thing that at the moment is uppermost in the mind of the speaker and presumably in that of the hearer too. (中略)

The indefinite article is used not only in introductory remarks....., where we expect further information, but also in a great many other cases where the singular of a noun is required, while no identification is possible or important.....

関口(1960)はドイツ語に基づいた冠詞論を展開したが、定冠詞と不定冠詞の解釈はJespersen(1933)のものと類似している。

定冠詞の機能は、その次に置かれた名詞の表示する概念が、何等かの意味において既知と前提されてよるしいということを示唆するにある。

不定冠詞の機能は、その次に置かれた名詞の表示する概念が、話者あるいは聴者にとって、

† kawayuko@mx4.canvas.ne.jp

何等かの意味において未知と前提されてよしいことを暗示するにある。

これら先行研究によると、定冠詞はそのあとに来る名詞が既知情報(旧情報)で唯一的に同定可能であることを前提に用いられ、一方、不定冠詞は指示対象が未知情報(新情報)であり、話し手と聞き手の間に指示対象に対する共通の認識が存在しない場合に用いられるといえる。

3. 冠詞と日本語助詞の関係

日本語には冠詞が存在しないが、冠詞と日本語の他の品詞との関連性は先行研究において指摘されている。関口(1962)は、「日本語の『て・に・お・は』も、『意味』というものは持たず、単に『意味形態』だけしか持っていないと云う点で、外国語の『冠詞』という現象にそっくりなところがある。」と述べている。また、鯉沢(2006)によれば、17世紀の初頭にはすでに西欧語の冠詞と日本語の助詞について言及した文法書¹が刊行されていたという。冠詞と助詞の関連については、格助詞「が」と「は」と冠詞に関する先行研究が数多く見受けられる。

3. 1 日本語助詞「は」と「が」の機能

大野(1978)は、「私は大野です。」と「私が大野です。」の例を用い、「は」は既知の情報を扱うもの、「が」は未知の情報を扱うものであるとしている。ただし、ここでいう「既知」と「未知」とは、その情報の実際の新旧を問うものではなく、話し手がその情報を「既知扱い」するか「未知扱い」するかのことである。

助詞は、客観的世界の事物を直接に指す言葉ではない……その話し手が、物や行為を表す言葉・概念をどう関連づけるか、話し手として主体的にどう扱うかということを表明する言葉である。たとえば、ガという助詞は、たんに未知のものを承げるだけでなく、承げるものを主体的に未知扱いすることを表示する役目を負うのである。

久野(1973)も、「は」と「が」の機能について、「古いインフォメーション」と「新しいインフォメーション」という観点から論じている。

主文の主語に現われる「ガ」は、名詞句がその文の中で、新しいインフォメーション(すなわち、文脈から予測することができないインフォメーション)を表すことをマークする標識である。

上村(1978)によれば、このような情報の新旧に関する考え方は、松下(1924)²やChafe(1970)³など多くの先行研究に見受けられる。

3. 2 冠詞と日本語助詞「は」と「が」の機能

上村(1978)は、「は」と「が」の機能の違いについて論じたうえで、「は」は旧情報に言及しており定冠詞theに対応し、「が」は新情報に言及しており不定冠詞a/anに対応すると述べている。さらに上村

¹ Ioa Rodriguez (1604-1608) *Arte de Lingoa de Iapan*.

² 松下大三郎(1924)『標準日本文法』

³ Wallace L. Chafe. (1970) *Meaning and the Structure of Language*. The University of Chicago Press.

は、乾(1959)⁴の「日本語の格助辞『は』『が』……の別は、一部は不定冠詞と定冠詞の用法に対応するものがある(There is a book. The book was on the table. 本が……、(その)本は……)」という主張以来、「が」と「は」、a(n)とtheとの対応がにわかに論じられるようになったことに触れ、その分析は「単純な事実の単純な指摘」に過ぎず、それぞれの助詞と冠詞の関係について論述したと言えるものではないと述べている。

4. 冠詞と日本語並立助詞「と」と「や」の関係

4. 1 問題提起

これまで格助詞「は」・「が」の機能、両者と定冠詞・不定冠詞との対応関係に関する先行研究について述べてきたが、筆者は並立助詞「と」・「や」の一部の用法と冠詞の用法が類似していると考え。ここで並立助詞の「と」「や」の意味機能について考え、冠詞の役割との類似点を指摘する。

4. 2 並立助詞「と」と「や」に関する先行研究

寺村 (1991)は、「二つ以上の名詞を並立的に結びつけるのに『ヤ』が用いられるときは、それらの名詞が、あるセットの具体例として、そのメンバーの一部として取り上げられていることを示す。先の『ト』が、そのセットのメンバーすべてを挙げるのと違って、『ヤ』は、そのほかにも同類のものがあるという意味を含んでいる。」と述べ、「と」を「全部列挙」、「や」と「一部列挙」と区別している。同様に益岡・田窪 (1992)⁵は、「と」を「総記」、「や」を「例示」とし、柏木 (2006)⁶は「と」を「全体化」、「や」を「類化」と区別している。一方、国広(1973)は「『や』は……いわば‘and’と‘or’の両方にまたがるものである。しかし英語では、‘and’と‘or’は対立概念であって、英語と同じ平面に立って考えれば両方にまたがる概念というものはあり得ない。『や』は全く異なった平面に属しているわけである。」と説明する。

また、朴(2006)は、『黒い雨』の例を用い、全部列挙で「や」が用いられる場合について説明する。

「もう池本屋も、広島や長崎が原爆されたことを忘れとる。みんなが忘れとる。あのときの灼熱地獄—あれを忘れて、何かこのごろ、あの原爆記念の大会じゃ。あのお祭り騒ぎが、わしゃあ情けない」

原爆が投下されたのは広島と長崎の二都市であるため、上は全部列挙である。それにもかかわらず、一般的に全部列挙とされる「と」ではなく一部列挙の「や」が用いられている。このような全部列挙に「や」が用いられる理由について、国広は、大した意味もなく「や」を用いる「やわらげ」と説明する。一方、朴は『『広島』『長崎』は『被爆地』という『カテゴリー』の背景の中に存在しており、『や』は相手に A・B の典型例を挙げることによって『A のような』『B のような』、それにふさわしい『カテゴリーC』を連想させる機能を持つ」と説明している。

さらに、市川(1991)も、「や」には「と」と同様に「全部列挙」機能をもつものが存在するとし、「全部列

4 乾亮一(1959)「英語と日本語—比較における二三の問題について」『英文法研究』 研究社

5 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版』 東京：くろしお出版。

6 柏木成章「『全体化』と『類化』：並立助詞論、特に『と』・『や』を中心として」(2006)『別科日本語教育：大東文化大学別科論集』 8：99-107。

挙」の機能を持つ「と」と「や」の使い分けについて以下の傾向があることを指摘している。

- 1) 「や」で結ばれる語は特定のものが多い。
- 2) 「と」は独立的、「や」は述語への依存度が高い。
- 3) 「と」は格助詞的、「や」はムードの助詞的(間投助詞的、とりたて助詞的)。
- 4) 「と」は厳密、「や」は大雑把、全体的。
- 5) 「と」は新情動的、「や」は旧情動的。

5つの傾向のうち、5)の「と」は新情動的、「や」は旧情動的側面を持つという傾向に関し、市川は井伏鱒二の『山椒魚』からの引用を用いて説明している。

岩屋の天井には、杉苔と銭苔が密生して、銭苔は緑色のうろこでもって地所とり(小児の遊戯の一種)の形式で繁殖し、杉苔は細く且つ紅色の花柄の尖端に、可憐な花を咲かせた。(中略)サンショウウオは、杉苔や銭苔を眺めることを好まなかった。むしろそれを疎んじさえした。杉苔の花粉はしきりに岩屋の中の水面に散ったので、彼は自分の棲家の水が汚れてしまうと信じたからである。あまつさえ、彼は岩や天井の凹みには、一群ずつのかびさえも生えた。かびはなんと愚かな習性を持っていた事であろう。

市川は、二度目の「杉苔」「銭苔」が出てくるときに「や」が使われていることを、「や」は否定的意味合いをもつ表現と結び付きやすく、「好まなかった」という否定形につながっていることによる可能性を認めつつも、初出で「杉苔」「銭苔」を旧情報として「や」で受けたとしている。

4. 3 仮説

市川の主張するように全部列挙の「と」を新情報、「や」を旧情報であるとするならば、先述の朴の『黒い雨』からの引用にも異なった観点からの説明が可能である。

- (1)1945年8月、広島と長崎に原爆が投下された。
- (2)もう池本屋も、広島や長崎が原爆されたことを忘れとる。(朴(2006))
- (3)桃太郎は、犬と猿と雉をお供に連れて行った。(寺村(1991))
(*Momotaro was accompanied by a dog, a monkey, and a pheasant.*)
- (4)桃太郎は、犬や猿や雉をお供に連れて行ったことを誇りに思った。
(*Momotaro was proud that he had been accompanied
by the dog, the monkey and the pheasant.*)
- (5)桃太郎は、犬と猿と雉をお供に連れて行ったことを誇りに思った。

(1)と(2)の全部列挙の例文を比較すると、(2)は(1)の内容を前提としており、既知の情報を「や」で受けているということが出来る。また、(3)(4)(5)も全部列挙であるが、(4)(5)は(3)の情報を前提にしており、(4)(5)で出てくる「犬」「猿」「雉」は唯一的に同定可能である。また、(5)に比べて(4)の方が自然に感じられることは、市川の『「や」は述語への依存が高い』という主張により説明ができる。(4)では、すでに既知の情報である「犬と猿と雉をお供に連れて行った」ことよりも、述部にある「誇りに思った」という未知の情報に焦点を当てていると考えることができる。この全部列挙における「と」を新情報、「や」を旧情報であるとする説明は、不定冠詞を未知情報、定冠詞を既知情報とする冠詞の機能についての説

明に類似している。そのため、筆者は全部列挙の「と」「や」と不定冠・定冠詞との間にも対応関係が存在するとの仮説を立て、BCCWJ データより全部列挙の「と」と「や」の用例を分析し、不定冠と定冠詞との関係を論じる。

4. 4 BCCWJ データに基づく「と」と「や」の分析と冠詞との対応

(6)海援隊のなかで靴をはいた写真を残しているのは、龍馬以外には池内蔵太だけである。内蔵太が靴をはいた写真を残したのは、彼が人一倍龍馬から目をかけられていたためかもしれない。(中略)一方、龍馬や内蔵太が靴をはいた写真を残しているということは、長崎市中を靴で歩いたかどうかは別として、龍馬にとって靴がかなり身近なものになっていたともいえそうだ。(LBa5_00012)

文頭で「海援隊の中で靴をはいた写真を残したのは、龍馬と内蔵太だけである」旨が述べられているため、(6)が全部列挙の文であることは明白である。それにもかかわらず「や」が用いられているのは、「龍馬と内蔵太は靴をはいた写真を残した」という情報を前提とし、その事実を旧情報として扱っているためであるとの解釈が可能である。この「と」と「や」についての新情報と旧情報という説明は、先に見た不定冠詞と定冠詞の機能とも酷似している。

(7)「宿命」というのは、前世から定まっている運命なんだ。例えば剛志や雅子ちゃんが、内海のお父さんとお母さんの間に生まれたということが宿命なんだ。内海の子は嫌だ。〇〇さんの家の子に生まれてほしい。と、子供はお父さんやお母さんを選んで生まれることはできない。
(PB54_00148)

(8)「しっ、あまり大きな声を出さないでください。おやじやおふくろが驚きます」
「よし、それじゃ手早く、勝負の日を決めようぞ。明日にしよう。朝早く、ここを出て、伊賀の里まで行くのだ」(中略)
「誰が行くものですか」
「そんなことを言っているのか。俺は忍びだぞ。足が速いだけではなく、人の命をもらうのも得意だ。おぬしの父親や母親が、ある日首をくくっていても、いいのだな」(PB19_00235)

(7)では、「内海のお父さんとお母さん」という新情報が提示されたあとに、それを前提とした「お父さんやお母さん」という旧情報が提示されている。(8)の例では、文脈より誰の父親と母親であるかは唯一的に同定可能であると言える。

(9)結婚を一週間後に控えた日曜日。ゆり子は結婚の打ち合わせや準備のため、枝川家を訪れた。(中略)仰々しい結婚式や披露宴はしたくない、という真行の意思に、ゆり子はすでに同意していた。このため、次の日曜の朝、二人で婚姻届を出した後、親しい人を家に招いて昼食を取る予定である。(PB29_00634)

(10)たとえば、学校には球技大会をはじめとして多くの行事がある。それらの企画や運営は、各学校の教育方針に沿ったものであり、多種多様である。その実施方法のひとつとして、運営

の一部または全部を生徒に任せるとする方法がある。(LBf3_00004)

(9)、(10)においても、「友里子が結婚を控えている」こと、「学校行事が多く存在する」ことがすでに情報として提示されているため、「結婚式」「披露宴」、「企画」「運営」はそれぞれ旧情報として扱われている。また、そのことにより、誰の結婚式と披露宴であるか、何の企画と運営であるかが唯一的に同定可能であるため、「と」のかわりに「や」が用いられていると考えることが可能である。

ここに挙げた BCCWJ データからの用例を見る限り、全部列挙における「と」は新情報、「や」は旧情報という解釈は妥当であると思われる。また、それぞれの情報の新旧や唯一的同定可能性の有無により、「と」は不定冠詞、「や」は定冠詞に対応すると考えることも可能である。

5. 結論

冠詞は日本語に存在しないため、助詞などの他の品詞がその機能を果たしていると言われている。とくに格助詞「は」「が」と定冠詞・不定冠詞との対応関係が論じられてきた。筆者は、日本語の並立助詞「と」・「や」の機能の一部と、「不定冠詞」「定冠詞」に対応関係があるとの仮説のもと、本研究を行った。定冠詞と不定冠詞の機能、並立助詞「と」と「や」の機能に関する先行研究を検討し、BCCWJ データの「と」と「や」を含む文例を検証した結果、全部列挙表現において、「と」は新情報を提示する機能を持ち、不定冠詞に対応し、「や」は旧情報を提示する機能を持ち、定冠詞の役割を果たすことを示した。今後は、日英対訳のデータ分析、統計的手法などを用い、さらなる調査が必要である。

6. 参考文献

- 安藤貞雄(2005)『現代英文法講義』開拓社
市川保子(1991)「並立助詞『と』と『や』に関する一考察」『文芸言語研究言語篇』20, pp. 61-79.
筑波大学文芸・言語学系
上村和也(1979)「英語の冠詞と日本語の助詞」『英語英文論集』10, pp. 29-49. 鹿児島大学教養部
大野晋(1978)『日本語の文法を考える』岩波新書
鯨沢千鶴(2006)「冠詞と日本語」『上智大学国文学論集』39, pp. 49-67. 上智大学
国広哲弥(1967)「'And'と『と・に・や・も』—日英両語語彙の比較—」『言語研究』50, pp.34-49.
久野暲(1973)『日本語文法研究』大修館書店
関口存男(1960)『冠詞—意味形態的背景より見たるドイツ語冠詞の研究・第一巻定冠詞篇』三修社
関口存男(1961)『冠詞—意味形態的背景より見たるドイツ語冠詞の研究・第二巻不定冠詞篇』三修社
関口存男(1962)『冠詞—意味形態的背景より見たるドイツ語冠詞の研究・第三巻無冠詞篇』三修社
寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味 第III巻』くろしお出版
朴 点淑 (2006)「現代日本語における並立助詞『と』『や』」『岡山大学言語学論叢』12, pp. 51-62. 岡山大学
Jespersen, O. (1933) *Essentials of English Grammar*. George Allen and Unwin.